
奏（騒）楽都市 O S A K A こんなE D集

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏（騷）楽都市 O S A K A こんなED集

【Nコード】

N 2 3 2 5 P

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

テンキー作 P S ゲーム「奏（騷）楽都市 O S A K A」のSSです。

妄想エンディングネタですので、ご存知の方にお楽しみいただきましたと思っています。

くAkira

奏（騒） 楽都市 O S A K A こんなED集くAkira

なぜだろう？

俺は広大なサバンナを見渡しながら疑問をもっていた。

何故こんな事になったのか、明らかに出来ない勢いはあった。
自分の手をじつと見る。

この手がすべて悪い、と。

急遽行われたバベルの閉鎖は、バベルに関連する全ての行為をも
差し止めるものとなった。つまり、俺たちのネット戦争も、それ自
体が結果の出ないまま終結した。

致し方ないだろうとは思う。

違法言詞版の使用の発覚を恐れたIZUMOは、俺たちを製作を
手伝わせて法的な困難さを細工し事態の混乱を招き、大きな渦の中
に全てを巻き込んだ。

IZUMOから範綱への権利移動、それによるバベルネット戦争
の延長。

延長の際の対戦相手は、範綱配下の大阪中央放送局。

大野木〓 庄司率いる大人軍団は、かつての子供達であり、俺たち
を写す鏡のようでもあった。

その中でも、光〓 欣一は手ごわい相手だった。

人の話を聞かない、それでいて自分の話は一方的、しかしそれは
大人の正しいありようであり光〓 欣一という人なり表している。

絶対の力を持った大人。

それが大阪中央に対する俺の持ったイメージであった。

あのバベル最後の日も、自分の端末に記録する作業で終えていた。記事も集めたし紙面も揃えた。

ないのは販売する場所だけ。

誰にも見られる事のないはずの、最後の新聞を表示して俺はため息をついた。

椅子の背もたれに寄りかかり、ぐつと背を伸ばすと、ぐきぐきと嫌な音を立てる。

そんな中と思う。

この十ヶ月あまりの戦いは、実の所、本当に意味があったのだらうか？

毎日が困難な相手と競い、そして最後には大人と子供と言う立場まで超えて戦ったと言うのに、自分の手の中に残ったのは一枚の電詞カードだけ。

あまり強い力で握らなくても、そのまま握りつぶせてしまうようなそんなカード。

しかし、これがあれば、あの約束された場所に立てる。

全てがソコから始まるのであろう、あの場所に。

椅子に寄りかかり、ぐつと背を伸ばす。

「さて、どうしたものかね。」

俺の眩きとあわせたかのように、窓がノックされた。

いつものように鍵を閉めていない窓が開かれ、そして、いつものようにコンビ二袋を満載した晃明が現れた。

「なんだ、また家出か？」

すると彼女は、むつと鼻にしわを寄せる。

「ちがうつすよ、打ち上げッス、打ち上げ」

「ああ？　うちあげえ？」

俺様の疑問もそこそこにアキラは勝手に上がりこんで、テーブルは用意するわ買ってきたものを広げるわ。

「さー、打ちあげっすよー、この十ヶ月を語りあおうっす。」

にこやかに微笑む彼女に誘われて、俺は向かい合わせにお膳に付いた。

「ささ、一杯。」

そう言っただけで差し出されたコップを受け取って空けると、思わず顔をしかめた。

「おめー、こりゃー、アルコールが入ってるじゃねーか。」

「そうっすよー、あるこーる１００％。まじりっけなし！」

「ばか、んなわけあるか！」

「あ、ばれたっすか？」

本当に馬鹿な事を言い合っているうちに、なんだか言葉も途切れなくて。

それでもそんな時間が疎ましくなかった。

「・・・な、アキラ。」

「なんすか？」

何となく照れくさくて、何となく気恥ずかしい気分に襲われた俺は、ぶっきらぼうに言った。

「そろそろ帰れ。　また光さんと喧嘩すつぞ。」

のっそり立って窓を開けようとすると、背後からアキラが俺に優しく抱きついた。

彼女の腕が丁度腰に回る位置に来ている。

固めの髪の毛が背中に押し付けられているのが判った。

「な、まじでやばいって。」

俺の言葉を聞かないアキラは呟くように言った。

「だめっすよ、だめっす。今日は覚悟して来たんすから。」

は？　思わず聞きなおした俺に、彼女は実力行動で出てきた。

「・・・とはいえ、興が冷めたっすから、予定変更っす!!」

電撃の動作で抱きついた姿勢から俺を背後に投げやるアキラ。意識は何かにつかって途切れ去ってしまった。

外では雀が鳴いている。

朝日が差し込んでいるのが知れる朝に、耳障りな音が聞こえた。かちやかちやとまるで朝食を取っているような音。

不意に過去の出来事が思い出されて目をあけると、そこには思ったとおりの人物が、勝手に朝食を食べている。

「光さん、勝手に人んちの食材で朝食をとらないでください。」

勢い良く身を起こすと、何となく眩暈がした。

「聞いてるんですか？　・・・本当に常識ってものをですねえ・・・」

そこまで言った所で、光さんは冷ややかな視線で答える。

「説教も良いが、その粗末なものを隠したまえ。」

指がさされた先は俺の股間。

気がついてみれば、俺は全裸で寝ていた。

いかんいかんとシーツを引き寄せるが、重いものが絡まっているかのような感触で動かない。

力を入れようとしたものの、先ほどの眩暈の余波で、思わずさらに手をついてしまった。

「きゃっ。」

可愛い声と共に下着姿のアキラが、俺の手を胸に押さえたままで身を起こした。

「だめっすよお、もう、リーダーってば大胆っすねえ。」

くねっとしなを作ったアキラであったが、正面に人影を認め軽く手を振った。

「あ、父さん。おはよう」

まあ、誰がどう考えても不味いよな。

すれ違い家族の関係が、やっと修復したばかりの父と娘。

そんな娘がイキナリ外泊した上に酒盛り、さらには裸同然で男と同衾と着たもんだ。

そこに父親が現れたとなったら、それなりの覚悟が必要ってものだろう。

短かった自分の人生に、辞世の句でも詠おうかと思っていたが、数秒の後においても何の終わりもやってこない。

視線をアキラから光さんに移すと、彼は既に食べ終わったらしく流しに持っていつている。

呆然とその姿を追っていた俺であつたが、不意に光さんの冷たい視線が俺を襲う。

「事故は事故と認めよう。しかし、いつまで人様の娘の乳を揉んでいるつもりだ？」

力の限りに手を引き離すと、何故がたその手にブラジャーがついてきた。

「あん、やだ。朝っぱらからっすか？ 父さんもいるんすから遠慮してほしいっすよ。」

耳朵をくすぐるアキラの台詞。

俺は間違いなくはめられたと言つ事を悟った。

血管を数十本浮き上がらせた光さんが、無言のままその場を去つたのを見取つた俺は、ため息を吐いてアキラを見つめた。

「おまえなあ、ちょっとは手加減しろよ。こんなんじゃあ、東京行きだつて危ういぞ。」

「・・・でも、いつまでも娘離れできないんじゃ困るんすよ。自分は東京で可能性を試したいし、向こうで生活していれば、それなりにこういう事もあるわけっすから。」

かなり真面目な風情で、彼女は語っている。

「確かに、おめーも女だから色々とあるだろうけれども、こんなんじゃあ単に親父さんをからかっているだけだぞ。」

「そうっすか？ 半裸の若い男女が一つのベットを共にしていて、何もない分けないじゃないっすか。」

一概にそうとも言えない。

なにせ、某金髪猫とは良くベットを共にしているが、これといって間違いは起こしていない。

「と、ちょっとまで。それじゃあ光さんは、俺とお前が何か有る関係だつて思つたつてことかあ？」

「何を今更いつてるんすか、リーダー。バベルの間、何度もこの部屋にお邪魔している事は父さんも知ってるし、自分の東京行きだつてリーダーが帰るときについていくもんだつて思つてるぐらいっすから。」

「て、てめえ。」

「へっへっへ、あながち外れている訳じゃあないんすけどねえ。」

照れたようにアキラは俺の手からブラを剥ぎ取る。

「おまえなあ・・・。」

「それとも、今から誤解じゃなくすっすか？」

にじり寄るアキラの額を俺は弾いた。

「馬鹿言ってるなよ。」

「結構本気だったんすけどねえ。」

ぶつくさと言う晃明は、何を思ったか玄関に向かって手を振り出した。

なんだ？ そう思ってみると、そこでは鍋を持ったお隣さんが硬直していた。

「あ、あの、ちょっとあまりものを・・・」

「あー、そのお、なんだ・・・」

「あ、あの、ぜ、ぜんぜん気にしてません、気にしてませんから・・・。」

「ずいぶんと、勢いよく勘違いしてないかい？ お隣さん。」

真っ赤になったお隣さんが、凄い音をたてて扉を叩き閉める。

いつのまにかブラどころか服一式を身に付けたアキラは、俺の横に立って迫力ある笑顔で俺に微笑んだ。

「まさか、ここまで来て逃げたりしないっすよねえ？」

わからんぞ？アキラ、と口の中で呟く。

何せこの俺様は、逃げに逃げて東京くん dari から大阪までやってきて、更に大阪でも逃げ続けた結果、バベルの勝者となったのだから。

逃げる事には自信がある。叶先生も褒めてくれたし。

いや、アレは褒めていないか。

「・・・やつぱり、ちょっと強引だったすか？」

ちよつと弱気のアキラ。

俺は跳ね上がるようなポニーテールを手ですいた。

「ばーか。おまえは、ちよつと強引だつてぐらいの方がお前らしいよ。」

へへへつと笑うアキラの笑顔を見て、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ俺も笑った。

こんな強引なやつがそばに居るのもいいかもしれないと、そのときは思ったのだが、後々まで残る後悔の禍根となるとは、そのときは思いもしなかった。

夜、突然に現れた光さんは、我が家の如くに俺の部屋で胡座をかいていた。

正面に座る俺は、朝の気まずさの為に能面のような顔をしていたつもりだったが、アキラ曰く「始終へらへらしてたつすよ」との事だった。

自覚なかったけどなあ。

十数分座り続けた光さんは、この春休みに取材もかねて家族旅行をすると言い切った。

「ほお、それはいい事ですね。」

「その通りだ。」

軽いジャブの応酬。

俺はその腕をかくぐつて、言葉のストレートを入れようとした

瞬間、相手の言葉が閃いた。

「娘息子、妻私に加えて、君にも来て貰う。」

「はあ？ 家族旅行でしょ？」

その一言に、光さんのこめかみがビクリとゆれる。

あ、なんか不味い事をいったかなあ、と思った瞬間、光さんはちゃぶ台を一気に乗り越えて、キスでも出来るんじゃないかという距離まで詰め寄った。

「なに、取材のバイトに来てもらいたいだけだ。高給のバイト代も出す。これは決定事項だ。」

「ええ、とお・・・。」

「妻も、実の父親の前で愛娘の乳を揉みしだく豪傑に会いたいといっているしな。」

滝のような汗が俺から流れ落ちてゆく。

視線の先に居るアキラは、俺に拝むようにぺこぺこしていたりする。

流れる川の如くの人生、激流真っ只中なんじゃなかるうかといぶかしんで見る俺だった。

なぜだろう？

俺は広大なサバンナを見渡しながら疑問をもっていた。

何故こんな事になったのか、明らかに出来ない勢いはあった。

自分の手をじっと見る。

この手がすべて悪い、と。

くグレアン

去年の暮れ辺りから嘔き出された噂。

学生寮の男子部屋に女が連れこまれていると言う、まことしやかな噂。

実際連れこんでいる生徒はいるだろうし、それを目撃した事もある。

が、俺は絶対に無実だア！ と叫んで見ても、今の状況を押さえられると空しい叫びになってしまう。

目の前には、金色の髪の毛を絨毯の様に敷いた少女。

・・・昨日までは猫だったのになあ。

ぼりぼりと頭を掻いていると、彼女も目を覚ました様だ。

『あん、人の寝顔を観察するのは、とても良くない趣味だと思いますわよ？』

あー、すまんすまん、そんな視線の奥の意思も彼女は読む。

『ふふ、朝食はまだですね？』

「ああ、そう言う事は、一切合財君に任せてるからね。グレアン。」
週の殆どを俺の部屋で過ごすようになったグレアン。流石にまづいのじやなかるうかと思つて、彼女の唯一の肉親リーズ・クーラーズに相談をして見ると、にこやかに微笑んでみせてこう言われてしまった。

「最後まで責任とつて、ちゃんと飼ってくださいね。」

そんな言葉の後に、ベットは貴方と兼用でしようからと小さなバスケットを渡されてしまった。

これはグレアンの部屋にあった「猫」の時用のベット。

肉親公認で本格的に引越ししなさいと言う事かなあ、といぶかしんでみる。

それって同棲って事だよなあ、とか考えると、きゅうに怪しげな

気分になつてきてしまった。

薄着で朝食の準備をする彼女を見ると、俄かに現実味が増したりなんかする。

『さあ、腕によりをかけましたの。たんとお上がり下さいな。』

いつもの台詞を聞きつつ、俺はバベルの恩恵を堪能していた。それにしても、ちちデカイよなあー。

『お食事のときは、余計な事を考えないでくださいませ！』

ぺしつとネコパンチ。

あいむそーりー、ひげそーりー。

ネット戦争終盤辺りでは今年度に入る前に留学を解くと言っていたグレアンだったが、何とかOSAKAに残ってくれる事となった。南大門女子の後輩達の喜びもひとえに俺様の功績ではないかと自負してみるのだが、事はそれほど簡単ではないらしい。

イギリス視察団によって行われた直接視察によって封鎖したバベルに、無断侵入したのがそもそも不味かったらしく、一時的な監視処分下に置かれた俺達に巻き込まれる形で出国を差し止められている。

ゴーカイさんの話しでは、本気で彼女が帰国を願っていればそれを止めだてする事は誰にも出来ないし、偉いバーサンが後ろ盾になつてくれるとの事だった。

偉いバーサンってのが何者かは問わないことにしているが、一つ思いついたことを提案してみることにした。

エアリアルシティー・ロンドン

『架空都市・倫敦を見てみたいですよ？！』

「うん。」

そう、そんなデッカイ後ろ盾が有るのならば、そいつを利用しないではない。

一度でいい、彼女の、グレアンの生まれた町を見てみたいと思ったのだ。

「そいつあ、無謀だぜ。ボーズ」

成功都市・紐育生まれで倫敦に渡り、その後、日本で大暴れの後に御山の教官となった現在コックのゴーカイさんに言われても、なんの感慨も無い。

「矛盾都市東京の矛盾の力を使えるならまだしも、おまえさんは単なる一般人だぜ？ 無謀も無謀、大無謀つてもんだ。因子変換に耐えられずはじき出されるのがオチってモンさ。」

俺が生まれた矛盾都市・東京は、世界七強都市に数えられるアクの強い都市で、都市自体が持つ力「矛盾の力」を俺がちゃんと強力に持っていれば、確かに倫敦も恐れるまでも無いだろう。矛盾の力が定まっていれば、成功都市での成功すら可能な力なのだ。

俺自身、ある程度は矛盾に生きているが、どちらかというと巨乳も良いけスレンダーも捨てきれない程度の話なので、大した意味は無い。

『ですが、彼はあの「バベル」の勝者ですよ。誰よりも意思は強いはずですよ。』

最初は驚いていた彼女だったが、嬉しそうに微笑むグレアン。ゴーカイさんはそれを見て苦笑いをしていた。

「こいつの場合は強いんじゃないかって、全然感じてないだけだと思うぜ。」

それでもゴーカイさんは動いてくれるといってくれた。

『じゃあ今日から倫敦のお話をしないといけませんね。』

「巨乳のせんせい、よろしくお願いいたします。」

ぼこりと俺を殴ったが、大船に乗ったつもりで安心してくださーいという彼女。

俺は出発前までやる気まんまんだった。

神田を思わせるビッグ・ベン。濃厚な霧に包まれたヒーロー空港。

神魔の多くのスコットランドヤードが行き来し、自動人形たちが魔物たちの間を駆けてゆく。神と魔物たちが何の疑問も無く混在し、

物語と伝説が息づく架空都市・倫敦。

俺は学校の図書館で、グレアンと共に夢を見る。

手を伸ばせばそこに君が居る。

「たったそれだけで俺は幸せだったんだなあ」

『駄目ですよ、あなたから言い出したことなんですから。もう向こうのホテルも予約してありますし、準備は万端なんですから。』

「・・・そうだったね。」

今日に入って何度目かの会話を、久川さんが見ている。

「あらあ、やっぱりお二人は仲がよろしかったんですね。」

そんな冷やかしを毎度毎度入れにくる所を見ると、何らかのゴシップネタを探りに来ているのかもしれない。

しかしそうそうネタにされてたまるものかという気分も俺にはある。

あるのだが、女人やしないがたしの言葉どおりに、俺の巨乳の先生と書士のお姉さんは仲良く世間話に興じていて、チヨコチヨコと話を引き出されていつてしまっている。

今だって、休み中に倫敦に帰ることや、ホテルを取っていることなんかも聞き出されてしまっている。

ちよ、ちよつとまでグレアンさん。

それ以上はまずいと思うんですが・・・。

誰かと、倫敦に行くという話が出てきてしまったあたりで、俺は冷や汗を流していた。

このままだと半ば同棲状態なのがばれてしまうのでは・・・。

「ぐ、グレアン！」

にんまりと微笑む彼女のその顔が、何らかの確信を持っていることが知れた。

いつまでもうろろしている俺を、彼女はじわじわと追い詰めていた。

こんな状況に、俺の良く知る人が追い詰められて、そして選んでいったのをよく覚えている。。

今ではその道を邁進している。

『・・・じつは、久川さん。わたくし、男性と一緒に倫敦に行きますの。』

ひええ、とか、ひよええ、とかよくわからない悲鳴をあげた書士は、いつそう顔を寄せて、その相手を聞き出そうとしている。

もちろんその視線はグレアンではなく俺に向いている。

『その人の名は・・・』

俺もそろそろ覚悟を決めないといけないみたいなのがする。

彼女が再びその口を開く前に。

ネコって根っからの狩人なのだと確信した瞬間だった。

くグレアン（後書き）

グレアンの所為で、子猫を見ると、人化してくれないかと妄想するようになってしまったわたしは変態と言う名の紳士になったと思う。
T
T

く 句 刻

ずぶぬれになった制服を着替えさせた。

パジャマ姿のお隣さんは、一回り小さくなったような気がする。

ずぶぬれの猫なんかを思い出した俺は、思わずにやついてしまった。

「せ、先輩、おじゃまします。」

何度も入り慣れているはずの、俺の部屋にはいつてきたお隣さんは、小動物のように緊張している。

まさに子猫、ずぶぬれの子猫。

「ま、座って座って。」

そういつてベットの端に座らせて、俺は自分の椅子に座る

なんだか更に小さくなってしまったようであった。

「いかな、それじゃ。」

「な、なにが、ですか？」

俺が大きく肩をすくめると、お隣さんは本気で心配した顔になった。

「これじゃあ、年端も行かない女の子を手籠めにする悪党みたいじゃないか。」

ぶつと笑うお隣さんは手渡されたコーヒーをすすする。

「・・・わたし、それでもいいんですけど？」

思わずうるたえる俺を、お隣さんは、いや、句刻はくすくすと笑った。

その姿に小動物のような怯えはもう無い。

つくづく、女の子は怖い。

「ホントは、ほんととは昨日まで、ほんのさっきまで先輩の事をどう思っているかわからなかったんです。」

寂しそうな笑顔。でも、ゆっくりと温かみがさしてくる。

「でも、図書館で待ってて、食堂に行って、帰り道で先輩の部屋の明かりを見て思ったんです。ああ、先輩が居てくれないと駄目だつて。」

既に真っ赤になった句刻。

その顔を見ていて俺は自分のアンフェア-さを感じていた。

ここまで言わせたら男が廢る。

「ねえ、隣に座ってもいい？」

「は……はい。」

ゆつくりとベットに腰掛けて、句刻のほうを直接見ないようにしながら、それでも句刻を抱き寄せた。

「……あ。」

官能的な声に理性が切れそうになったが、どうにか押しとどめた。

「おれ、さ、いろんな事してきた。」

「……はい。」

「大阪に来るまで、色々あった。」

「……はい。」

「いろんな人に会って、いろんな人と話して。」

「……はい。」

「それで、……好きになった。」

「……。」

「好きになったよ、句刻。」

何の言葉も無く、何の音も無く、句刻はハラハラと涙を流していた。

彼女の涙は俺のシャツをぬらす。

大雨に打たれるように濡れるのだろうと俺は思った。

「大好きだよ、句刻。」

「わ、私も、好き、だいすきです、せんぱい！」

夜明け。

結局、お隣さんは一晩中話に俺をつき合わせて、その上で根掘り葉掘り穿り出きった。

つやつぱい展開も何も無く、なんだかアキラがやってきて、一晩はなしこんだ、そんな夜に似ていた。

東京に居た事、陸上をやっていた事、葉漁のこと、全部離してしまうと、何だかすつきりしたような気がする。

「先輩って、お隣好きなんですか？」

朝食を準備しながらのその台詞に、俺は思わずむせこんだ。

違うと否定するのは簡単だが、大概彼女と話しているときはそんな選択はしない。

「ちがう、男の浪漫だ。美人のお隣さん、幼馴染、世話焼きさんとか眼鏡っことか・・・、くう、少年漫画の王道パターン！」

「先輩、わたしは非常に真面目に聞いているんです。」

「おれもかなり真面目に欲望の文を話しているぞ。」

絡み合う視線で、先にそらしたのはお隣さん。

「・・・もういいです。やっぱり私達ってこういう関係以上にはならないんですね。」

寂しそくに台所に向いたお隣さん。

性分なんだけど、と頭を搔いてみても、言葉にしない言葉は伝わりにくい。

無言もまた言葉だというミスターの言葉も、この場では何の役にも立たない。

「はい、出来ましたよ。」

寂しそくに笑う彼女。俺はちょっと迷って、それでもきつぱりと言った。

「じゃ、頂くとするよ、句刻。」

「はい、たんめしあが・・・え？」

「なにしてるの、一緒に食べようよ。」

「はい。・・・はい！」

ね、句刻。」

涙を流しながら句刻は微笑む。

そんな姿を見て、俺はこんな時間もいいかもしれないと思った。

いつぞ、寮の部屋ばかりではなく学校でも肩を並べることが多くなった俺達を、冷やかす女教師二十数才がいるが気にしないことにしている。

とはいえ適当に相手をしないと本気で暴れるので相手にするが、不穏な台詞が耳に残る。

「おい、クソボーズ。インコウには気をつけろよ。」

俺達二人はその台詞と向き合わないといけない日が来ることを感じていた。

く句刻（後書き）

妹、飛び級、そしてネクラ。
やべー、ヒット過ぎるw

能力が微妙に低いのもゲーム的にいい感じでしたねーw

く文音

奏（騒） 楽都市 O S A K A こんなEDシリーズ

卒業と言う節目が学生には有る。

それは現大阪守護役の九条先輩においても同じ事だ。

当然のことだが真面目に授業を受けて、真面目に課題を出していれば間違いなく卒業出来る。彼女の職種を学校側も考慮しており、課題だけをちゃんと出していれば良いそうだ。

そう、真面目に課題を出していれば。

「というわけで、大阪守護役九条邸では、現在三日目の徹夜が行われようとしております。」

「誰に実況中継しとるん？」

誰もいない壁に向かって俺が独り言を言っている所で、背後から一冊の本が襲う。

その名を「架空都市」。

「って、死んだらどうするんですか!」

「この程度で死にさらすようなたまじゃあるまい。さあさあ、とつとと数学？をあげんか。」

「センパイ、真面目な話、この前から全然課題やってませんね？」

以前にも先輩の部屋に突然呼び出され、徹夜で課題を手伝わされた事があった。

「しゃあないやろ、いたらん後輩の世話で奔走してたんやから。流石に三学期までバベルが続くとはおもってなかったんやからなあ。」

そう、誰しもにとって意外な展開と結末をバベルは迎えた。
しかし俺達は誰もそれに甘んじる事は無かった。

間違いの無い結末を得るために、あの時から準備を進めていた。
が、その中かなり重要なことが叶先生から告げられる。

「文音、あの娘の卒業やばいわよ。」

基本的に大阪守護役等の超法規的學生は大学生以上の学力を保持しており、高校在学と言うのは一種のステータスとしていただけで有る。

従って、学力面で一介の高校生を上回る大阪守護役九条文音の卒業が危ういなどと言う自体は考えにくい。考えにくいが、それなりに思いあたる事が無い訳ではない。

やはり、あれだろう。

「課題、ですか？」

「・・・そ。」

バベル争奪ネット戦争中にもあった事だった。

あらゆる試験の免除、日々の授業の免除の替りに学校側が要求したのは『課題』の提出だった。

無論彼女の学力を持ってコツコツとやっていれば、このような事にはなるまい。

が、俺の知る限り九条先輩と「コツコツ」という形容詞は結びつかない。

「どちらかって言うと『コツコツ』ですよね。」

「何がじゃ、あほたれ！」

ふたたび宙を舞う「架空都市」。
俺の顔面に吸い込まれるようにヒットする。

どうにかこうにか数学？を上げた俺は、九条先輩と一息入っていた。

先輩のうちのおばあさんは、ちよつと休憩といったところになると、すかさずコーヒーなどを携えて現れたりするのが油断ならない。

「ばーさん、道具を置いてけや。あとはじぶんでする。」

につこり微笑んで去る老婆を見て、これが巨大鏡餅に向かって鉈を振るう老人の片割れなのかと感心してしまった。

「なあ、きいてええか。」

「ええ。」

「なんで、なんで、私を手伝う？」

ずるこける俺。

まじまじと見つめる先輩は、かなり本気なようだった。

なんでつて、先輩に無理矢理拉致されて、先生に脅されていて、お隣さんに頼まれてて、俺自身迷惑かけてるから・・・。

言葉を色々と連ねようとして、そして気付く。

言葉より確かで、そして俺達にとって確実な方法があることを。ちよつと恥ずかしいけど。

「答えは、ここにあるんですけど、ちよつと見てみますか？」

俺は自分の唇を指差して微笑んだ。

すると、ちよつと頬を赤くした九条先輩が、ゆつくりと唇を重ねる。

さし伸ばした俺の腕が先輩を抱きしめる。

先輩も、ゆつくりをおれに腕を回す。

ゆつくりとゆつくりと時間が過ぎていくのが俺にもわかっていた。世界で一番長い時間。

あけた日曜日、先輩が買い物に付き合えと言い出した。

戦闘服でない、完全な私服の九条先輩は、とてもやわらかく思えてならなかった。

両手一杯に買い物をした先輩は、にこやかに微笑む。

「よし、きょうは手料理をご馳走してやる。」

「・・・先輩、料理したことあるんですか？」

一時期、食材で一杯であつたうちの冷蔵庫を開けては、生で野菜を平らげていった彼女の台詞と思えなかったからだ。

「ない、しかし今日からはじめる。」

「・・・無謀な事はしない方が良いのでは？」

「あたしの手料理が食べられなんつて言うんか？」

「まだ作ってもいないでしょうが！」

そんな会話の中、九条先輩は思い出したように笑った。

「なあ、わたしとおまえがこんな風に歩くようになるって、そんなふうにおもつとったの、しつとるか？」

「え？」

「ずっとまえ、ずっとまえにわたしはお前とこんな風に歩くようになつたんですよ。」

「い、いつからですか？」

「ふふふ、今夜教えたる。・・・ゆつくりな。」

く文音（後書き）

大阪守護役は、キャラが濃すぎて書ききれません。

でも、かなり大好きなので、ゲーム中では絶対にデートできないとわかっていても電話しちゃいました。

あははは。

ゝギャルゲー的ED（前書き）

とりあえず、こんなエンディングはありませんw

ゝギャルゲー的ED

奏（騒） 楽都市 O S A K A ギャルゲー的ED

続きに続いた10ヶ月、東京を出る前にはこんな事になるとは思
いもしなかった。

最初の敵が大阪圏総長連合だったというのも驚いたけれども、そ
の後も驚いた。

各部門を勝ち抜いてきた一癖も二癖もある敵たち。

それを上回って、混みに込み入った過去と現在を抱える仲間達。

学生同士の情報戦争だった戦いは、いつしか本物のテレビ局の大
人達を相手するようになっていた。

学校法に規制された大人と子供の世界が交わり、そして火花を散
らしたのだから驚きもする。 現在の世界情勢にも一石を投じるよ
うな出来事は、大人も無く子供もない、すべてが世界の力によって
結末をつけられた。

すべてがバベルに始まりバベルに終わっていったのだ。

「何故バベルを求めるのか」

九条先輩にそう問われた時、俺は答えを持っていなかった。

バベルを求めたのは成り行きだったしどちらかというと、流れに
身を任せた結果だったから。

しかし、最後になれば、最後の最後になれば俺でも答えの一つで

も出ているだろうと思っていた。

お隣さんと九条先輩は、あの激しい戦いの中でそれなりの結論を得た様だった。

アキラと光さんも物騒な親子交流の中で何かを、元治と中村さんもミスターと安先生も、そして・・・グレアンも。

周りの人間が次々と答えを出して行く中で、俺はいつまでたっても答えが無いままだった。

この前の晩、蕎麦屋で葉漁のやつが「言葉」を残して行った。

あいつが勝ち残った時にバベルの上で残そうとした「言葉」。

今思い出しても恥ずかしくなるような奴を、だ。

安先生曰く、俺と似ていると評された鋼博士。

彼は俺の手の中に電詞カードを残して走って行ってしまった。俺とのうじうじと悩む「うじうじ男」コンビを一方的に解消して。

彼にとってバベルは既に過去のものであり、バベルは過去に残した言葉の形なのだ。

ともに手を携える相手がいるのだから、これから発する言葉も力強いものになるだろう。

「・・・ん。」

伸びをしつつ見た外は、いつのまにかの雨。

いい勢いで雨が降っているところで、いきなりドアがノックされた。

「ノック」というこの段階で、相手はかなり絞られる。

九条先輩ならば正面突破で現れて「トイレを貸せ」だの「大阪守護役や」とかなんとかいって冷蔵庫をあさるはず。アキラなら窓からコール。こつこつと窓をたたか、こつこつと窓を割るかだ。

グレアンにしても雨の日ならばノックよりも鳴き声が似合うだろう。

お隣さんは、・・・窓から覗く限りどうもまだ帰ってきていない

様子なので……。

「何しけた顔してんの。」

「それはこっちの台詞です、先生。」

担任教師にして広報部の顧問、叶〓綾先生は何か不満げだった。

「ネット戦争も一応終わって、皆で慰労会でもやってるかと思いきや……、なんなのこの寂れた部屋は。」

慰労会は俺を除いた全員が、さつき食堂でやっているのを見た。
いや、あれは慰労会とか言っても良いのだろうか？

新手のいじめとか吊るし上げ大会とか言っただぐいの行為に思えてならない。

「前にも言ったかもしれませんがね、うちは『個人の自由を阻害しない』っている不文の硬い結束が有るんです。」

とかなんとか言っているが、心休まる正月のわが部屋に、いつのまにか会室となんら変わらないメンバーが現れて占拠していったが。

「あのねえ、スカシまくりは良いけれど、ここは天下の台所、人情一筋ナニワのオオサカなのよ。郷にிரりては郷に従えっていうでしょ、今からでも遅くないからとつと用意しなさい。」

「なにをですか？」

「いろいろよ。」

言いたい事だけ言って去って行く先生。

俺はまたしても一方的に取り残されてしまった。

今だ降り続ける雨を見つめていると、俺の携帯電話が鳴る。
それは九条先輩からで、打ち上げをしようと言ったものだった。
勿論、打ち上げの食料はいつもの様に持参して来いと事だったので、コンビニで大量に食料調達をする事にした。

「えっと、・・・こんなもんかな。」

あの人って、ディスプレイみたいに食べるから、とかなんとか
呟いた自分が、まるで男の部屋に通う通いようだとか何とかいつて
みたり。

そんな小さな呟きが漏れた先に、一人の少女を見つけた。
ずぶ濡れの体を厭うことなしに歩みつづけるその姿は・・・

「や、お隣さん。どうしたの？」

300円で買ったコンビニカサを差し出すと、ゆっくりと彼女は
俺に向けて視線を上げた。

「せ、センパイ。」

「風邪を引く予定なら先に言って欲しいな、全身全霊を持って看病
してあげるからさ。もちろんイヤラシイ事付きで。」

「・・・・・・。」

無言のままお隣さんは、俺の腕の中に倒れこんでくる。

「なに、もう風邪引いたの？ まいったなあ、こんな外じゃアイヤ
ラシイ事も出来ない。」

「ち、違うんです。・・・今日終わった後、先輩に会える気がして

図書館に行っただんですけど会えなくて。しょうが無いかなって思っていたんですけど、それでも会いたくて。気付いたら雨が降っていて、それで、それで……。」

それでそれで、と繰り返すお隣さんを覗き込むように俺は言う。

「ねえ、おとなりさん。今から九条先輩のところに打ち上げにいくんだ。一緒に行かない？」

「ね、姉さんの所にですか？」

弱々しげだった視線が、急に光を帯びた様に見えたのはなんだったんだろうか？

「ういーっす、きましたー。」

「ようきた、はよはいれ……？」

俺に続いてお隣さんが入ってきた事に、何らかの疑問を持ったような視線の九条先輩だった。

「……どうした句刻。なんか用か？」

「……姉さんが打ち上げをするって聞いてから、わ、わたしも……。」

「さやか。」

重苦しい沈黙が辺りを占める。

無言の九条先輩に無言のお隣さん。

俺はこんな雰囲気満喫するためにきたのだろうか？

まあ少なくとも、この前の公園の時よりは温和な雰囲気に見える

からよしとしよう。

正面に座りあう姉妹、その中間で思わず注ぎ役に徹する俺。

なんかこんな雰囲気になる予定ではなかったんだけどなあ。

そんなこんなで時間が過ぎる中、最初に口を開いたのはお隣さんだった。

「・・・わ、わたし、わ、わたさない、渡さないよ、姉さん。」

「なにを、や。句刻。」

「言葉にしなくても、姉さんだってわかってるはずよ、わ、私だってわかってる。」

「・・・そうやな。」

冷たい沈黙の一瞬。

「で、でも、渡さない。渡したくない！」

「・・・ならばどうやって決める？ またやりあうか？」

そんな会話を交わした二人は、何となく俺を見つめていた。

俯き加減のお隣さん、真正面から見据える九条先輩。

「?」「?」

二人の視線の先には、何故か南大門学院女子部の制服を持って座っている俺の姿が見えた。

その制服は、今、一匹の子猫が、よく見知った金色のかわいい子猫が引きずってきたものだった。

子猫は引きずってきた制服を俺に抱かせると、そのまま制服の中にもぐりこんだ。

二人の少女が見つめる中で、瞬間的に制服が膨らむ。

もそもそと襟口から首を出したのは、金髪の子猫、いや、グレア

ンだった。

『もう、何処に行っていたんですが貴方は。寮に行っても居なかったからとても探しましたわ。』

につこり微笑む彼女は、俺の首っ玉に両腕を回して抱きしめている。

「おい、お前。・・・どういっこつちゃ。」

「せ、先輩、やっぱりグレアンさんとそういう関係だったんですね！」

そういえば、素っ裸のグレアンが部屋のドアを明けた先にいたのはお隣さんだったつけ。

ずっと周囲に気合いの冷気が立ち込めたところで、グレアンはちゅちゅちゅと指を振る。

『迷い猫だった私を拾ってくれて、そして帰る所を作ってくれたのは彼ですの。その時から私は彼の飼い猫になったんですわ。だから彼が誰と付き合おうと、私は彼を離す気はありませんのよ。』

「ちよ、ちよ、ちよ、ぐれあんさん？」

『あら、申し開きなさるんですの？・・・グス、生まれたままの姿で一緒にお風呂に入った仲ですのに……』

「だあああ、無茶苦茶誤解が有るぞ、そのいいかたわあ！」

猛烈に慌てる俺の首根っこを引っ張って、瞬間的に九条先輩は唇を合わせる。

十分な時間で言霊が読まれた。

「…………ふっふっふ、なるほどなあ。」

にやつく九条先輩をグレアンは思わず睨みつける。
それを睨み返した九条先輩は、なんのモーションもなしにグレンの目の前で大きく手を打ち合わせた。

パチン！と大きな音と共に、グレアンの姿は見えなくなっていた。そのかわりに九条先輩の手の中に、一匹の子猫が。
言わずとしたグレアン猫。

もしかしたらと抵抗しているにもかかわらず、子猫の扱いに長けて来た九条先輩の敵ではなかった。

「なあるほどなあ、全部読ませてもらったでえ。」

壮絶な笑みを浮かべる九条先輩、不機嫌そうな子猫のグレアン。その関係に何らかの意味合いを見取ったお隣さんも、それに加わった。

ちりちりと前髪が焦げるような視線の応酬に、再び闖入者が一人。

「あ、それいいつすねー。自分も混ぜて欲しいなあー。」
「！」

何処から現れたかアオキラがカメラ片手でニヤニヤしている。

「おい、アキラ。何処から現れた。」

「うつす、リーダー。ちょっと小耳に挟んだモンで、猛烈な勢いできたっす。」

誰から何を聞いたかは敢えて問うまい。

誰かと言えば、二十数歳の身の上で、クリスマスを一人孤独に過ごす女性教師で有る事が予想できたからだ。

『あら、そうなんですか？』

いつのまにか人に戻っているグレアンがそう問う。

「まあ、それしかないだろう・・・って、おれ口に出してた？」

すると五人の女性が頷く。

「五人？」

九条先輩、お隣さん、アキラ、グレアン、先生・・・。

「げ。」

「・・・・・・・・」

にこやかな表情で先生は、げしげしといつまでもけりを入れつづけたのであった。

「ほんとにもう、打ち上げするっていうから来て見れば、君以外みんな女の子じゃないの。何考えてるかねえ、ほんとに。」

何を考えているのかと問われるほどに考えている訳でもなく、いつのまにかこうなっちゃったんですが・・・、と言って見ても先生の様子に変化は無かった。

まあ、女の子ばかりといっている先生は、どちらかと言うと女の子じゃないわけで。

そう考えた所で再び先生の拳が俺を襲った。

「あ、また口に出てた?」「出てた出てた。」「出とったぞ」「出てましたわ」「先輩、口は災いの元です」

確かに。

薄れ行く意識の中で噛み締める俺であった。

存分に憂さをさらした先生が俺に問う。

「・・・それで、納得した?」

何の事かと問うまでも無い。

出来る訳が無い、出来そうに無い。

バベルを求める動機が無いのと同じように、バベルを諦めるための理由が無い。

そつと手を添えた胸に有るのは、鋼博士から預かった電詞キー。

これをどう使うべきかをずっと考えていた。

「先生。」

「ん、なに?」

「やっぱり、きっちり終わらせたいですよ。」

「……………」

「…………誰が否定しても、バベルはそこに有る。そして手にしたのは……………」

ずっと自分の手を見つめる。

何ヶ月もの間、会室で校正をしつづけた。

長い時間を厳しく乗り越えてきた。

この手が何を求めているのかと言えば、単純な事なのかもしれない。

い。

きゅつと握り締めた両手は、とても単純なものを求めている、そう確信する。

「先生、これから先の事は黙って見ててもらえませんか？」

きゅつと唇を噛む先生。

「みんな、ちよこつと延長戦、付き合ってもらえないかな。」

周囲は表情を和らげる。

それを了解の意味と見取った俺は、携帯をかけまくった。
辻巻・ミスターを呼び出した後、もう一人に電話をかける。

「おう、ちよつと時間あいてるか？ 葉漁。」

「何処行つてたのよ貴方。部屋なんかもぬけの殻で、いそいそ行つて損しちゃったわ。」

「・・・何しに来たんだよ。」

「よ・ば・い。」

「・・・！」

「冗談よ、バベルもあんな調子だから、積もる話しも有るかなって思つて寄つただけ。」

いそいそやつて来たつて言つてくるせに。

「それはそうとこんな時間に何の用なの？ デートの御誘いなら考えてあげるわよ。」

なんか皆、各々で盛り上がってる気がするの、何故なんだろう？
そんな事を考えながら言葉を搾り出す。

「デートでもいいがな、ちょっと手伝ってほしいことがあるんだ。」

「あなたからそんな御願いなんで、・・・珍しいわね。なに？」

「延長戦を手伝って欲しい。」

「？」

「バベル争奪ネット戦争、俺達の手で終わらせるんだ。」

「！・・・今、何処？　すぐ行くわ！」

集合先は九条家。大阪でこれ以上機密性の高い場所は無いだろう。

「なんで大阪守護役なのよ！」

そんな声の向こうでも着替えてごそごそしている気配を感じる。

ま、何にしても動き始めた。今度は自分の意思で、自分達の意味で。

例えゴールに何があっても構いやしない。

・・・歓声が聞こえる、今だ煩わしい歓声が。

自分でゴールを迎えたその時、この歓声はどう感じるのだろうか？
それはあそこに行かなければ解からない事なのかもしれない。

・・・歓声が聞こえる。

歓声が聞こえる！

ゝギアルゲー的ED（後書き）

えー、まあ、あわせるとこんな感じになるかなってな、EDです。
妄想っすよ、ええ。w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2325p/>

奏（騒）楽都市 O S A K A こんなED集

2010年12月1日06時46分発行